古河市教育振興基本計画（後期計画）案に関するパブリックコメントの実施結果と意見に対する考え方について

（１）古河市教育振興基本計画（後期計画）案

（２）実施期間　　令和４年１月１１日（火曜日）～１月３１日（月曜日）

（３）閲覧場所　　古河庁舎（２階）教育総務課、古河庁舎（１階）市民総合窓口室、総和庁舎（１階）市民総合窓口課、
三和庁舎（１階）市民総合窓口室、古河市総和福祉センター「健康の駅」（1階）　福祉推進課、
古河福祉の森会館（1階）　健康づくり課

（４）意見の提出状況　提出人数　　１名

（５）ご意見の概要及びご意見に対する考え方　　一覧表にて記載

〇対応区分
Ａ：意見の内容が計画案に含まれているもの
Ｂ：意見を踏まえた修正･対応を検討するもの
Ｃ：意見または要望として承ったもの

（６）その他
・いただいたご意見の概要を掲載しています。
・いただいたご意見のうち、「本計画案自体の内容に関する意見ではない所感など」については、関係課へ伝達しました。

番号	頁	ご意見の概要	対応区分	ご意見に対する考え方
1	P.30	●成果指標（実態把握のための新たな発達検査(WISC-Ⅳ)実施可能校を増やす）について 実施可能”校数を増やす”というより、検査の実施やその後の支援等を考えていくに当たり、専門的知識を有する臨床心理士・公認心理師等の配置が重要と考えるので、その人数の指標を設けてはどうか。 発達検査自体の読み解き、そこから考えられうる支援策は、専門的知識が必要であり、実施可能校数だけを闇雲に増やすと、検査使用者のレベルが乏しい場合が出てきて、あまり効果が上がらないのではないか。	C	ご意見のとおり、検査の実施やその後の支援等を考えていくうえで、専門的知識を有する臨床心理士・公認心理師等の配置は重要であると考えます。 一方で、児童生徒の実態把握のためには検査の数値のみではなく、主訴や学校・家庭の様子等の情報が必要です。これらの情報を一番よく把握しているのは、小中学校の教職員です。 また、小中学校の教職員が検査を実施することにより、児童生徒一人一人の実態把握ができ、よりよい教育的支援につながると考えます。検査のレベルを担保するために、日本版WISC-Ⅳ刊行委員である大学教授を講師に、小中学校の教職員を対象に計画的な研修を実施しています。
2	P.40	●「学校図書館支援員配置」について 課題解決への取組として、全小中学校に「学校図書館支援員」を配置するのであれば、令和8年までの目標値の成果指標として、学校図書館支援員の現状値と目標値を掲載すべきと考える。	B	小中学校の「学校図書館支援員」については、すでに市内小中学校全32校に配置していますので、成果指標に加えていません。今後も全校への配置を継続しながら学校図書館支援員を効果的に活用し、学校図書館の環境整備を通して児童生徒の読書率向上を目指していきたいと考えています。 いただいたご意見を踏まえ、計画案40ページの内容について見直しを行いました。

番号	頁	ご意見の概要	対応区分	ご意見に対する考え方
3	P.51	●コミュニティ・スクールについて コミュニティ・スクールは、学校運営協議会・地域学校協働活動推進員の存在が肝となる仕組みだと考えるが、そこを骨抜きにすると、コミュニティ・スクールとは名ばかりで、現行通りの学校となってしまう。結局現行ならば、それにわざわざ時間や人員を割くメリットが全く感じられないので、無理にコミュニティ・スクールを設置する必要はないのではと考える。	B	ご意見のとおり、学校運営協議会や地域学校協働活動推進員は、コミュニティ・スクールで重要な役割を担うと考えます。ご意見で懸念されている状況にならないよう、学校運営協議会委員や地域学校協働活動推進員と学校の教育目標を共有し、学校の運営と必要な支援について協議し、連携・協働のもと課題解決をしていくコミュニティ・スクールを導入したいと思います。 いただいたご意見を踏まえ、計画案51ページの内容について見直しを行いました。
4	P.73	●科学の楽しさを体験できる機会の提供について 成果指標において、「青少年のための科学の祭典の満足度」を指数にするのではなく、「機会の提供」を促したいのであれば、「参加者数の増加」を指数にすべきと考える。	C	コロナ禍により直近２か年の同大会はオンライン型を軸に実施しましたが、従来の参集型から参加者数が大きく変動しました。 今後も感染症の予測が困難なため、参加者数は経年比較に適さないと判断しています。また、科学の祭典に対するニーズの把握とフィードバックに重点を置きたいと考えたことから、「参加者数」ではなく参加者の「満足度」を指標としました。